英語教材研究の一考察：教材の考え方

佐々木　隆

プロローグ

筆者は本誌第 44 号で「英語教材教材の一考察：学習意欲、動機付け」(2024) について論じた。教材研究では、学習意欲、動機付け、そして、教材の 3 点について取り上げる必要があるが、紙面の関係からそのすべてを第 44 号で取り上げることができなかった。これまで「アニメを利用した英語教材研究」(2005)[1]、「教員免許状更新講習と英語教材研究」(2016)[2] をはじめとして、特定のマンガやアニメなどを事例とした教材研究を行ってきたが、本稿では前号に続き、「教材研究」とはどのように行うべきなのかという大きな枠組みのもと、「教材」に関する考え方を整理しておきたい。

1　「教材」とは何か

教材と教科書の関係についてまず確認しておきたい。教科書については「教科書の発行に関する臨時措置法」の第 2 条で次のように規定されている。

> 第 2 条　この法律において「教科書」とは、小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校及びこれらに準ずる学校において、教育課程の構成に応じて組織排列された教科の主たる教材として、教授の用に供せられる児童又は生徒用図書であつて、文部科学大臣の検定を経たもの又は文部科学省が著作の名義を有するものをいう。

教科書とは「教科の主たる教材」ということになる。現代は教科書さえ教えていればよいという時代ではない。教科書の構成については、中学

校の英語の教科書の言語教材が満たすべき条件として2008年に発表した文章の中で末岡敏明は次の3点を挙げている。

条件１：網羅的であること

特定の意図や用途に限った教材でない限り、言語教材は当該言語の表現形式をできるだけ網羅的に含んでいなければならないというのは当然のことに思われる（末岡　322)。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

…言語教材に盛り込む内容は文法事項だけではない。語彙、「読む、書く、聞く、話す」という4つの技能、言語の使用場面、言語文化や言語芸術に関する情報等々、言語教材に盛り込むべき要素には様々なものがあり、それらのどれに関してもすべてを盛り込むことは不可能なのでどの範囲までを網羅するかという判断が求められることになる（末岡　323)。

条件２：体系的であること

ひとつの言語教材の中では、その中の記述内容や記述形式が全体として体系系であり、整合性がなければならない。もちろおん、教材にとって優先的に求められるのは学習効果である。学習効果が保証されている限りにおいては、その内容が整然とした体系を持っていなくても、あるいは、多少の矛盾を含んでいても構わない（末岡　323)。

条件３：内包的配列であること

一般的に、教材には「積み上げ型」のものと「積み直し型」のものとがある。言語教材の場合は、前者の代表が教科書であり、後者の代表が文法書（文法学習書）である。積み上げ教材というのは、文字通り、知識をゼロから積み上げていくことを想定して作られた教材である。一方、積み直しが型の教材というのは、ある程度知識があることを前提として、その知識を整理・強化するための教材である（末岡 323-324)

なお、本稿では「教科書」ではなく、副教材などと呼ばれるような教科書外の教材を取り上げることを主眼とする。しかし、教材の考え方を明確にするため、教科書の考え方をここで確認した。

教材研究は「教育学の研究のうえでは極めてたちおくれた分野であるといわねばならない」(柴田 a　7) 状況が続き、従って、「教材学を科学的に基礎づけるためにはその研究対象と方法を確立しなければならない」(長谷川 a　11) 時期を迎えていると言ってよいだろう。日本教材学会も 1989 年 1 月に設立されたが、その趣意書には教材に対する考え方が大きく変化していることが伺える。長くなるが引用しておきたい。

> 教育課程の研究の中で見逃せなくなっている重要な研究課題は、教材の問題であります。学習の成立を図るために、いろいろな方法で活用されている教材についての研究は、これまでも各方面の学会や研究会において積極的に取り上げられ、その研究が進められてきました。しかし、これまでの研究はどちらかというと、視聴覚教材、放送教材、教科書教材、図書教材あるいは CAI のソフト教材というように、メディア別の教材研究に焦点を合わせたものだといってもよいと思われます。最近では、これらのメディアの活用を横断的に進めるマルチ・メディアミックス的利用への研究の関心が高まってきています。
> それに、個性化教育、個別化教育の展開に伴って伝統的な教材という概念ではなく、学習材という概念も登場し、その研究も行われてきています。教材という概念は、集団的な授業を前提とし、集団の全員に共通の情報を提示するものとして主として使われてきました。しかし、個別化、個性化教育という時、教えるための教材というよりも、子どもたち一人ひとりの学習を成立させるための媒介としての教材が必要となってきています。それを学習材と呼ぼうとしているものと考えられます。

さらに、コンピュータの授業への活用は、教材が世界を広げる動きをみせてきています。いままでの教材は、二次元の世界の教材でしたが、コンピュータのソフトは、三次元の世界を見せることも可能にし、シミュレーション的な仮定の世界を作ってそれを見せ、教材化することも可能にしています。
このようにして、教材研究の新しい世界が、今日大きく開けてきています。そこで、これまで各分野で個別に行われてきた、この研究を総合的、横断的に研究する立場から、教材研究を正面より取り上げて研究する教材学会の設立が必要になってきているものと考えています[(3)]。

萩原弘子「英語の授業における視聴覚教育の役割」(1992) でも教材としての可能性について次のように述べている。

最近の生徒たちにとって、どのような視聴覚教材が有効な学習効果をもたらすだろうか。テレビや漫画文化の中で育った生徒たちは、言語表現とその背景との関係を直感的にとらえる能力は優れているが、うわべだけの知識獲得に終わっていないだろうか。また生徒の興味・関心は多様化しており、学習指導においても一斉授業だけでなく、個別化した授業や、ペア・ワーク、グループ・ワークなどで変化をもたせた指導が必要であり、それに適した教材が求められている。
言語習得のための理想な視聴覚教材は、学習者がそれを見たり、聞いたりした時に、なんらかの方法で聞いたり、話したりしたくなるようにしむける教材である。なぜならば、人が聞いたり、話したりしたいと思う時は、思考と言語との間に密接なつながりが現れるかである。このつながりが密接でればあるほど、使用される言語は理解され、記憶に長くとどめられるものである。したがって目に見えるもの、耳に聞こえるもののすべてが最適の教材というわけではない。Topics が身

近なもので生徒の興味・関心をひくものであり、視覚的には動きに変化があり、色感やセンスが豊かで、ユーモアやウイットに富んでおり、聴覚的には音声・効果音を含めて、日常的によく聞かれる自然なトーン、スピードのものが望ましい。また、学習したことを、必ずフィードバックさせ、定期的にテストし、評価することは、学習に進める上で大切である（萩原　229-230）。

JACET 教育問題研究会編『英語科教育の基礎と実践［改訂版］―新しい時代の教員をめざして』（2001）では次のように述べている。

授業というのは基本的に、教材を媒介とした、教える側と学ぶ側との interaction によって成立する。学習者の希望を無視した一方通行的授業や、学習者に迎合するだけの授業では、教育的効果はほとんど期待できなく。教師の「教えるべきもの」と、学習者の「学びたいもの」とがうまくかみ合って、授業が展開していくことが理想である。

しかし、学校教育における学習者の実態およびニーズは、年齢、地域、学校、クラス、さらに個人によって千差万別である。したがって、すての状況に有効な教え方は存在しえない。教師は自分に与えられた場の状況に、弾力的に対処しなければならない（JACET　25）。

教師の「教えるべきもの」と学習者の「学びたいもの」の「もの」を実体化したものが「教材」となる。

2　教材の捉え方

教材や教材研究の捉え方を時系列で見ておきたい。「教材」がどのように捉えられてきたかは、法令や教職課程の制度は年代により異なるが、引用はそのまま行う。

執筆者等	内容
篠原助市（1935）.『教育辞典』	教材は学校に於ける教授の材料を指すに止まれども、陶冶材は、教授の材料は固より、苟くも精神界の形成に興る文化材を総称し、其の中に、例へば、映画・演劇・少年文学の如きも含め、其の範囲教材よりも広し（篠原　232）。
梅根悟他監修（1950）.『新教育用語辞典』	〔英　subject-matter　サブジェクト・マター〕 教材とは教科の具體的な内容であり、文字通り、教育上の材料である。教師の側からいえば教科學習指導上の材料であり、生徒の側からいえば學習を進めるための材料である。尤もそれは材料とはいつても、書物もフィルムやラジオや繪圖など、外形的、物質的なものをさすのではなくて、それらのものの中にもりこまれる文化内容をさす。したがつて教科は適切にして具體的なよい教材をもたなければ望ましい教育内容のまとまりはならないわけであり、教材の選擇・構成・排列が重要な問題になるのである（梅根他　14）。
納谷友一(1952).『英語の新教育用語辞典』	サブジェクト・マタ　subject matter　教材 教科の具体的な内容で、教育上の材料。教科は、適切で具体的なよい教材をもたなければ、望ましい教育内容のまとまりとならない（納谷22）。
梅根悟（1953）「教授法」	※「教材」「教材研究」の項目なし。 【教授の資料（教便物・学習方便或いは教具）】 教授・学習が行われるためには資料が必要であ

	る。最も素朴な教授は何らの使用を用いず、ただ教師が自己の有する知識或いは思想を言葉を以て生徒に傳える講和式教授であるが、教授を一層客観的ならしめ有効にするために教授用図書即教科書が用いられるるに至る。教科書は長い間殆ど唯一の教授資料として学校教育に君臨した。教授は教科書の讀み方を教え、その語義を説明し、それを反復讀誦せしめて、その記述内容を記憶せしめることを以て終始した。即ち教授は久しく教科書中心の教授であった。然るに新しい学習指導においては教科書以外の多種多様な資料を活用する（梅根　242)。かくして新しい学習指導においては各種に應じて自由に、しかも巧妙にそれらを活用せしめることを重要な着眼とする（梅根　242)。
教師養成研究会英語科教育部会（1956).『英語科の教育』	教材とは、学習者を教科目標へ到達させるために用いる材料をいう。学習者を教科目方へ到達させるためには、まずそのプランとして、教育課程を立案、作成することは前章において述べたとおりであるが、教材はその立案、作成された教育課程に従って実際の学習指導を行っていく上の最も具体的な内容となるものである（教師養成　45)。
周郷博（1959).『現代教育用語辞典』	教材研究　教育研究の勉強をしている人、あるいは代表にたずさわっている人、ことに小・中学校の教師にとっては欠くことのできない研究。３つの仕事がある。(１) 教科書の教材について、指導するのに必要な知識をうる、(２) 教

	材が適当であるかどうかの検討、(3)教育目的に応じて、どんな教材を選ぶべきか研究する。教科書だけにたよって教えていた時代とはちがって、いろいろな視聴覚教材もあるので、じょうずに活用するかどうかは大へん子どもに影響する（周郷　75)。
神戸大学教育学部教育学研究室編（1960).『教育用語辞典』	教材　教育の目標を達するために形づくられた教育の内容をいう。教材の全体系が教科課程であり、その小さなまとまりが単元といわれる。教材は主として教科書という形でつくられており、指導書にその教育的な性格が解説されている。視聴覚教育などでは教材が教具と区別しにくいということもある。教材には、子どもに伝達すべき価値としての人類の遺産が正しく含まれているはずである。また、それが子どもの主体的な学習を呼びおこすことができるように、子どもの生活と経験・達成・能力・興味などへの配慮がこめられているはずでる。教材観ということがいわれるが、それはこの２つの観点から教材を正しく理解し批判するものでなければならない（神戸大学　90-91)。 教材研究　教材研究という語には２つの異なった意義ある。その１つは、教師が学習指導に先だって教材を調査した研究することであり、他の１つは、小学校教員の免許状を取得するのに必要な教職に関する専門科目の一種で、小学校の各教科の目標・教育課程・指導方法などを研究する科目のことである（神戸大学

	91)。
富田竹三郎（1961）.「教材」	教財ともいわれ、生徒を教授する場合に選ばれた対象（または材料ともいう）が教材である。その対象は教授のために、特に選ばれたもので、全くの自然物や文化財そのものではない。ある程度整理され、ときには教授のために再構成されたものである。教授がこのような経験の対象（または材料）をもつことが、そしてこの対象についての生徒の経験を指導することによって、生徒を形成しようとするのが、他の教育機能と違う、教授の特色である、とされている。 教授される内容が教材でるともいわれている。すなわち教科によって学習するところの事実、過程、原理、反応や行動の様式のような教授内容が教材といわれる。また教育の原理や方法と区別される教育の内容が教材だともいわれる。 教材を教授の内容と見る見方と、経験の対象としてみる見方とが、教育史の中に起伏して現れている（富田竹三郎　172)。
佐藤正夫（1966）.「教材研究」	教材というのは、知識・技能を発達させ、教育の目的を達するために学習させるべき素材のことである。広い意味では、教材ということばは、諸教科において教授し習得させるべき知識・技能と、それを習得させるための具体的な材料とを包括するが、普通は、後者の意味で用いられる。また教授＝学習過程を効果的にする

	ために用いられる物的な手段、たとえば実物・見本・標本・スライド・フィルム・掛け図などのようなものも、教材と呼ばれることがあるが、これはむしろ教具と呼ぶべきものであろう。 教材研究には次の２つの立場がある。 第１は、教材は通常教科書という形で与えられているから、その教科書の教材について、それを指導するために必要な知識を得ようとする研究（佐藤　100）。 第２は、教科書に与えられている教材がはたして妥当であるかどうか、この教材ではこういうことを教えることになっているが、ここでこのような教材を用いて、このようなことを教えるということが、はたして妥当であるかどうか、というふうに、与えられた教材を批判的に検討し、さらに進んで、教育の目的、各教科において学習させるべき事項に応じて、どのような教材をどんな順序でどう扱っていくべきかを明らかにする研究、つまり教材の批判、教材の選択・組織の意味における研究である（佐藤　100）。
重松鷹泰監修／竹中輝夫（1969）.『教材研究の基礎』	ところで、教材研究のとらえ方は、人さまざまであって、類似のものでも微妙なニュアンスの差異を含んでいるのが実情である。私はそれらを次の６つの視点（側面）からとらえてみたいと思う。 （１）　教材を成り立たせている事実（知識）

	の研究 —学習対象である事実（知識）理解— （2） 教材が含んでいるねらいや指導事項の研究 —教材に含まれている価値の発見— （3）学習者に教材を即応させるための研究 —教材の拡充や変容の工夫— （4） 子どもの思考と教材のはたらきとの関係の研究 —教材を生み出す根拠の追求— （5）有効な計画（単元）づくりとしておこなわれる研究 —学習の流れと教材の位置づけの吟味— （6） 教材のとりあげ方についての批判的研究 —教材の評価と批判— もちろん教材研究が、このような６つの種類のものに、せつ然と分けられるという意味ではない（竹中　9-10）。
三枝孝弘（1973）.「教材・教具」	教授（学習指導）の内容と児童・生徒の学習活動を結合する材料を教材といい、その材料をさまざまな形で展開させたり、あるいはれを支えるような物質的補助用具を教具という。 教授（学習指導［１］）は、学校教育の特質的任務であって、文化の獲得を通して児童・生徒の知的、精神的、身体的または情緒的な成長発達を促進する重要な教育作用であるが、複雑多

	岐にわたる今日の文化内容を、教育目標にてらして一定の観点から選択し、学習者近接させなければならない。このようにして選択されたものが教材となるが、そのばあい、選択された内容は、何らかの物質的補助用語（表現媒体）としての教具をとおして具体的に表現される。したがって教材と教具は密接に関係がある。たとえば、教科書は、そこに盛り込まれている内容の角度からみると教材であるが、文字とさし絵などの印刷媒体を使用した物とみれば、教具の一種である。あるいは、映写機は、ふつう備品を理解するという教授＝学習目標を達成するために使うことになれば、実物として映写機そのものは教材としての機能を果たすことになる。しかしその内容構造その他をフィルムで上映するという使い方の場合には、その映写機は、教具としての役割を果たすことになる。 　わが国では、主たる教材として教科書が考えられ、その他の教材補助教材といわれている。これは、検定制度あるいは教科書採択、無償の問題と関係してでのことであるが、本来の教材・教具という観点からは、今日、視聴覚教材への着眼が必要である。それは、印刷媒体による教材の提示というレベルにとどまらないで、ひろく児童・生徒の学習活動を活発にする可能性にとんでいるものであり、かつ言語偏重主義の教育を克服するために重要な役割をはたすものである（三枝　135）。

主原正夫（1978）.「教材」	〖教材制度〗　学校教育に利用される教材とその利用については、学校教育法第 21 条に次のように規定されている。「…文部大臣の検定を経た教科用図書を使用しなければならない。 ②前項の教科図書以外の図書その他の教材で有益適切なるものはこれを利用することができる。」 この法律で教材は教科用図書（以下教科書とする）、教科書以外の図書、その他の教科とされている。教科書は検定を経たものを使用しなければならないのに対して、図書その他の教材は、有益適切なものは利用することができるとされており、教科書とそれ以外の教材には作成や利用について違いがあることがわかる（主原 310）。 〖教材の意味〗　教材には多様なものがあり、制度としては、教科書、教科書以外の図書、その他の教材とに分けられており、各種機材の関連が問題になってくるのであるが、まず教材の意味を考えてみよう。 教材ということばは伝統的に幅広く用いられてきている。教材研究という場合には、たとえば社会科課程や単元についての研究を意味する。これに対して、教材・教具（教育機器）という場合の教材は、たとえば社会科の教授＝学習活動において利用される映画や TP 教材などを意味する。教材は教育の内容という意味と教授学習活動に用いられる物質資料という 2

	つの意味に用いられていることがわかる。 　次に教材・教具ということば（概念）の関係であるが、文部省の教材基準では、教材ということばには教具や教育機器が含まれている。共通教材の場合にはそのほとんどが教具である。ところが近年になってティーチング・マシンが利用されるようになってうると、教材の代わりに教育機器ということば用いられてくるようになり、逆に教育機器ということばのなかに教材という意味が含まれようになってきた。 　このように教材と教具（教育機器）をあらわすことばが混乱しているところから、ソフトウェア（教材）、ハードウェア（教育機器）ということば用いられるようになってきたが、これに対応する日本語は定着していない。また視聴覚教育事典では各種の教具（教育機器）と並んで演示とか見学などが含まれている。このようにみてくると、教材とはなにかの検討は、ことばのレベルの問題ではなく、教授システムにおける教材・教具（教育機器）の位置づけの問題として究明する必要がある（主原　310-311）。 教材の多様化　…教材は学習内容、学習指導方法と学習者の条件からくる教育的必要によって多様化されてくるのである。教材の多様化とか、マルチメディアといわれる意味は、教授設計が多様になることを意味するのである（主原　314）。
高　橋　金　三　郎	〖意義〗　単純に「教材」といえば、すべて教

(1978).「教材研究」	育に必要な資料・施設のいっさいも含まれることになるが、教材研究でいう「教材」は、当面の教授目標である特定の単元についての教育内容とその教授にとくに必要な資料に限定さるべきであろう。 同時に、教材研究の「研究」も教育内容や資料の研究ならばどんな研究も教材研究であるというようなものではない。「教材研究」という名称を好まず、「教材解釈」とか「教材構成」という名称を使う人が多くあるのはそのためである。教材研究はつねに授業を前提にしている。「授業を展開するのに役立つように、教材を解釈し、構成し、組織する実践活動」が教材研究である（高橋　316)。
中内敏夫（1978).『教材と教具の理論』	教育的価値の世界を、言語を媒介にして対象化したのが教育目標である。世にいう「人間像」は、その形象化をはかったものという関係になる。教材と教具は、この教育目標を効果的に達成するために選ばれ、あるいは加工された、言語的または非言語的素材である、と一般的には考えられている。ここに効果的とは、より多くのものに、より早く、より愉快に、よりたやすく、等々の意味を含む。言語的なものを教材、非言語的なものを教具と区別する場合と、両者ひっくるて教具とよび、教材はむしろ、教育内容ないしは学習領域をさすものとする場合がある。両者の区別は、教育実践の系の違いにより異なるから一律に決めることはできない（中

	内　1)。 教科書は、学校教育では教材のもっとも主なものである。また、そのあり方をめぐって、各時代の為政者や知識人が深く関心を示してきた教材である。教科書に対して知識人だけでなく政治指導者層の関心が高かったのは、その素材になる文字文化が官僚制（広い意味での）にむすびついて発達してきたからにはほかならない。 　そういうわけで、官僚制の発達しているころでは、教材といえば書きことばの教科書だけを考えがちである。たしかに、読本は子どものためのものだ。しかし、教室を出れば子どもには遊びの世界である。遊びは子どもの「世界認識の方法」である。読本もふくめて、教材は、子どもが世界を認識するときの媒介物として考案されてきたものであるといってよい。そうだとすると、遊びもまたひとつの教材である。ただ、この教材は、教科書とちがって映像文化や手労働や話ことばの文化を主な素材とする（中内　13)。 大人から子ども、あるいは子どもがつくりだしている教育関係のなかに登場し、教育の媒体となるすべての文化財（中内　14)。 　教材は教師が学習者に伝え、習得させたい教育内容（知識や技能、道徳や芸術など）を学習者が取り組むことができる形に具体化した言語的な学習情報であり、ソフトウェアである

	（中内　24）。
柴田義松 a(1980).「教材研究の課題」	教材をもっとも広義に解釈した定義として、「教師及び児童・生徒の間を媒介して教育活動を成立させるもの」（『広辞苑』）とか、「大人と子ども、あるいは子どもと子どもとがつくりだしている教育関係のなかに登場し、教育の媒介となるすべての文化財」（中内敏夫『教材と教具の理論』）などがある。 ところが、教具についてもこれと同じように、「教育活動において媒体（medium）となる具体物」（『教育学大辞典』第一法規）とする定義があり、教材と教具の区別がつかなくなってしまう。実際、以前は「教具」のなかに教科書をはじめ、すべての物化された教材を含めて考える用語の使い方が一般的にあった（城戸幡太郎「教具とはなにか」『教育』1957 年 11 月号）。ところが、文部省が小・中学校等の教材・教具を計画的に整備するためにつくった「教材基準」（1966 年）では、黒板から楽器、木工用具、体育用具、視聴覚機器までが教材とよばれ、教具の概念を駆逐している。文部省は、他方で、大学における小学校教員養成課程において「教材研究」を必修科目としているが、この場合の「教材研究」は、中・高等学校教員養成に必要とされる「教科教育法」に相当するものである。つまり、ここでの教材概念は、教科の内容や方法を意味している。同じ文部省の用法でも、教材概念はこのように混乱しているのである（柴

	田a　4)。
垣田直巳編（1981）.『英語科重要用語300の基礎知識』	教材(teaching materials)とは，ある特定の指導事項を学習させるための材料である。ここの授業で扱う教材というように比較的短いものを指すこともあれば，LL 教材というように特定の言語コースの教材の全体を指すこともある。 授業を構成するものとして昔から学習者、教材、教師の3つの柱として挙げられている。教材はその意味から言って授業を成り立たせる重要な要素である(垣田　129)。
小野慶太郎（1982）.『人間形成における教材選択の視点』	教材とは、人間形成に役立つ力の総体としてカリキュラムの材料を意味する。この役立つ力は既成の教材にも存在しているが、自然や社会のうちにも存在し、また人間の五感ではとらえきれない無意識の深みの場所にも存在している（小野　5)。
本多公栄（1988）.「教材研究」	授業の展開に当たり、当該授業の目標、内容に即したもっとも適切な方法をふくだ学習の対象についての研究、したがって、授業は、教師の教材研究によって成り立つといえる。教科書が「教科の主たる教材」(教科書臨時措置法）と規定されていることから、教科書研究と同一視される場合が多いが、教材研究は年間の見通しのもとに 1 時間ごとの授業をどう構成するかをもっと広く、自由に考えて進める必要がある（本多　214)。
藤岡信勝（1988）.「教材づくりとは	「教材」の語は、翻訳語である「教授材料」の略語に起源をもつ。明治の「学制」期には、教

何か」	材は、教科におよび教科内容の意味をふくむ、教授における文化財一般を指す語として用いられていた。しかし、教育内容が国家的に統制されるにつれ、教科書中心の教授活動となり、教材の概念がより深められ発展する余地はほとんど失われていった。戦後、新教育の時期以降は、戦前への反省から、子どもの経験そのものが教材であるという考え方もあらわれた。これは教材の所与性に対する批判としての意味をもったが、教授における文化財一般という教材概念の基本的構成要素を的確に位置づけられないという欠陥があった（藤岡　215）
磯田一雄（1990）.「教材」	意義 教材とは教育内容を具体化したものであり、学習の到達目標を含んでいる。教材と教科内容（授業によって子どもに習得されることを期待されている知識・技能）とは明確に区別されなければならない。同一の教科内容がさまざまの違った功罪で学習されることもあれば、同一教材を通して、さまざまの違った教科内容が習得されることもあるからである。 教科内容と教材との関係をはっきりさせるということは、ある教材で何を教えようということは、ある教材で何を教えおうとするのか（何が教えられるのか）をはっきりさせるということである。この区別がつかないと教材の選択や解釈があいまいとなり、したがって授業のねらいがはっきりしなくなる恐れがある（磯田

	19)。 あるもの（素材）となるもの（教材） 教材とは子どもの自己学習にゆだねてもよいような、単なる学習材ではない。それは教師の教授行為によってはじめて十分にその文化的可能性が発掘され習得されるべき文化財である。教材は授業展開の過程を経てはじめて言葉の真の意味での教材に“なる”のであって、そのままでは学習のための単なる素材にすぎない。教材は子どもの感性をゆさぶり、論理的な思考を刺激するような意味での典型性を持たせるために、教科内容の目標に近づくには多少の問題点があっても、子どもの生活や関心により近いものを選ぶことがしばしばある（磯田19)。
小田幸信（1991）.「教材と教科書」	現在使用されている検定教科書は、どれを取ってみても多少の欠陥があって、使用する教師にとって不満足な点が多くあることがよく知られている。生徒の能力や特徴をよく知っている教師が自分で教材を作るのが理想的であるが、これも困難なことである。現在、多くの教材が市販されているが、伊藤（1991）は教科書が優れた教材である（小田　48)、、、
奥住忠久（1993）.「教材研究」	授業は、教師と子ども（学習者）の活動と教材とから構成されるが、これらの要素を適切に関係づけ、目標、内容、方法を一体とした授業を設計し、それを現実に成立せしめるために鋼材研究は教師におって不可欠の課題である。

	しかし、教材とは何か、というにその意味するところは多義で、教育目標達成のために教育的に編成された学習内容であるとする考え方もあれば、教材の教授・学習を通して子どもが学習することを期待される知識・技能を学習内容（教科内容）と考えて、教材と区別する見方もある（奥住　340）。
柴田義松 b（2001）.「教材研究」	教科書は、「教科の主たる教材」と法文でも言われ、教材の中で特別の地位を占めているが、現在では教科書だけが教材ではないし、各教科で学習される内容、つまり教科内容と教材とは明確に区別される必要がある。同日教材の学習を通して様々なの異なる教材によって学習されうるからである。ところが、わが国では戦前に形成された教科書絶対主義の影響などから、教科書そのものを教えるという教科内容と教材との同一視がいまだに根強く残存している（柴田 b　161）。 教材研究とは、できるかぎり質の高い授業の実現を目指して、教材づくりから授業づくりに至るまで、教材について行われる一連の研究活動全体を指す（柴田 b　161）。 現在、教材はおおよそ次のような機能を果たしているといえよう。①教授内容の選択、②学習課題の提示、③学習内容の教示、④子どもの診断評価。 教材が実際の教授―学習過程の中で果たす機能を明らかにすることは、教材研究の基本的

	課題となるものであるが、その機能は、教師のはたらきとの関係で決まる流動的なものであり、固定的に考えることはできない。つまり、どのような機能を果たす、どのような教材が望ましいかということは、教師の機能を含めて教授—学習過程の全体をどのように構想するかに依存するのである（柴田b　161）。
卯城祐（2001）.「学習者」	授業前の準備として教科書の言語材料をチェックし、分からないところがなくなっても、それでも教材研究が終ったことにはならない。それは学習者のレベルであり、教える側の準備はそこから始まる。どのような例文を用い、どんな言葉で説明をしたらわかりやすいのか、また、どこで生徒がつまずきやすいのなどを事前に予測し、その解決策なども考えることが求められる（卯城　53）。
宮坂義彦（2003）.「教材」	教材は学習対象であると同時に教授手段である。学習（教授）内容を習得するために子どもがはたらきかける学習対象のうち、目的にかなった学習が生起するように意識的に工夫された教授手段としての学習対象が教材である。 教材を形態別にみると教科書などの言語的教材とスライドなどの非言語的教材およびその中間に位置する教材に分けることができる（宮坂　82）。
三村和則（2003）.「教材づくり」	教科内容獲得のため子どもが直接取り組む対象が教材である。指導案づくりの際にその教材を設定ないし開発する営みが教材づくりで

	ある。教材開発ともいわれる。板書された図・記号・式も教材の範疇に入る。文学作品、絵、写真、地図、グラフ、モノ、ビデオ、統計資料、新聞記事、TV 番組、CM、マンガ、民話、童話、歌、音楽など、あらゆるものが教材になりうる（三村　141）。
冨田福代（2003）.「教材研究」。	授業を行うに当たり、学習対象の文化的素材である教材と授業も目標・内容を理解し、全体の系統性や関連性を考え適切な指導方法を構想すること。授業目的や内容に沿って教材が選択されるが、子どもの発達段階や実態に即して再編成され、さらに効果的な指導方法が考慮された後やっと授業として生かされる。単に教材内容の理解にとどまらず、この一連の過程を教材研究としてとらえる必要がある。どのような教材研究がなされるかにより、子どもの理解や授業の成否が左右されるといえる。研究授業だけでなく、日常の授業でも十分な教材研究がなされることが求められる（冨田福代　69）。
柴田義松・宮坂琇子・森岡修一編（2004）.「教材研究」	教科書をはじめ教材は、教授‐学習活動の直接的対象となり、教科内容の習得を助ける手段となるものである。同じ内容が種々の異なる教材によって習得されたり、同一教材の学習を通してさまざまの内容が修得されたりする。教科書が果たす基本的機能としては、①現実の情報・知識を伝達する情報機能、②知識を構造化し、体系化するのを助ける構造化機能、③合理的な学び方を学ばせる学習指導機能、がある。教材

	研究とは、教科の本質・目標に照らし、これらの機能を最も効果的に果たす教材を発掘したり、開発する教材づくりを含む研究をいう（柴田・宮坂・森岡　17)。
高梨庸雄「教材開発」(2007)	教材は昔のように 1 冊の教科書があれば事足りた時代と違って、各教科において地区毎に、あるいは学校毎に、地区や学校の特徴を取り入れた自主教材を作ることが活発になっている。今や、教材は教科書を含むマルチメディアの時代に入っている。中でもパーソナル・コンピュータを活用した自主教材が増えている。日本でも遅まきながら教師も教材開発を真剣に考えるようになり、その中からすぐれた自主教材も生まれてきている（高梨庸雄　193)。 教材には authentic materials（自然な教材、以後 AM と略す）と呼ばれるものと、created materials（創造された教材、以後 CM と略す）と呼ばれるものがある。前者（AM）は、本来、教育用に作られたものではない資料（物語、記事、ビデオなど）が教育のために使われている場合である。それに反して後者（CM）は、最初から教育の場で使われることを意図して作成されたものである。AM を支持する人は、次のような点をその良さを挙げている。 ・学習動機にプラスの影響を与える。 ・目標言語の文化に関する情報が“本物”である。 ・生の（real）言語に触れることができる。

	・学習者のニーズに直接応えられる。 ・指導により創造的に取り組むことができる。 CM を支持する人は、次のような点をその良さに挙げている。 ・創造された教材も自然の教材と同じように学習動機に役立つ。 ・創造された教材は、普通、難易度が滑らかに変化していくので、自然な教材に勝る可能性もある。 ・自然な教材は教師にとって負担である。 CMを支持する意見の最後ものは、自然な教材は、前述のように、教育用に書かれたものではないから学習者にとっての難易度が考慮されていないので、クラスが能力別編成でないかぎり、難しいと感じる学習者の方が多く、従って教師によって教える負担が大きいとうことである（高梨庸雄　197）。
角山照彦（2008）.『映画を教材とした英語教育に関する研究』	「教材」とは「指導法」に基づいて作成されるものであることを考えると、結局、「教材化の遅れ」という問題点は、「指導法の未確立」という問題点に起因するものと言える（角山　32-33）。
山口満（2008）.「教材とは」	教材という用語は一義的に定まった定義は得られていない。しかし、ごく一般的には、教材とは、授業において指導すべき教育内容を学習者の学習課題として具体化した材料のことであると定義される（山口　22）。
福沢周亮（2008）.	教材は、従って、教育の目標を実現するため

「教材と心理」	に具体化したものであって、教材の条件として、第一に教育目標との関係が問われるのである。 しかも、その教育目標は、学習者の成長や発達が考えられて設定されることが望ましい状態と考えると、教材には、おのずから心理が反映せざるを得ない。しかし、これは常に表に現れているとはいい難いかもしれない。 その意味で、より強く認められる条件が、指導者との関係が問われることになる。第二の条件である。 同じ教育目標を具体化した教材であっても、指導しやすいものとそうでないものがあるのだ。 もっともこれは、指導者と学習者との関係の中で出てくることであるため、指導者のみに焦点を合わせた解釈は難しいかもしれない。しかし、例えば、ひらがなの読みを教えるのに文字法を使う場合と文章法を使う場合では、前者のほうが扱いやすいのではあるまいか。つまり、ここに指導者の心理が反映するのである。 以上、こうして教育目標と指導者を取り上げて、それぞれにおいて心理の問題が関係することを指摘してきたが、結局、それは学習者の心理に集約されるように思われる。つまり第三の条件である（福沢　42-43）。
藤川大祐（2010）. 「教材・教具」	教材・教具　教育活動において用いられる事物。教材と教具とは似たような意味で用いられ

	るが、教材が教育内容と密接にかかわるものを広くいうのに対して、教具はさまざまな教育内容を扱う際に用いられる具体的な道具をいう。たとえば、算数で用いるタイルや理科で用いる磁石などは、教育内容と密接にかかわる素材と考えれば教材といえるし、教育活動において用いる道具として見れば教具ともいえる。他方、国語で扱う文章や音楽で扱う楽曲は教材であって教具とはいえない。また、教師が算数・数学で用いる大きな定規や理科実験で用いるビーカー等は、教具とはえいえるが通常は教材とはいわない（藤川　74）。
桂直美（2013）.「教科書」	教科書は「主たる教材」であって、教師は「教科書を」ではなく「教科書で教える」と言われるようになった（桂　39）。
宮本友弘（2013）.「教材研究」	教材開発の過程は、「教材構成」とも呼ばれ、教材の構想から授業への導入に至るまでに、検討すべき事項と行うべき作業への導入が定式化されている。 まずは、①意図対応性（学習指導の目標に対応しているか）、②典型性（学習内容を典型的に反映しているか）、③問い誘発性（子どもの好奇心・探求心を喚起するか）、の３つを検討する（宮本　21） 教材のあり方は、結局のところ、どのような学習活動と学習成果（形成すべく学力）を構想するかによる。それらに理論的根拠を与えるのが、学習理論には、「行動論的アプローチ」「認

	知論的アプローチ」「状況論的アプローチ」の3つがある。 行動論的アプローチは、行動の客観性を重視し、刺激と反応、環境と行動との関係を明らかにしようとする。期待される学力としては、知的学力を技能とする。期待される学力としては、知的学力や技能的学力が中心になる。教材としては、プログラム学習が典型的である。 認知論的アプローチは、認知の働きの過程や結果である知識の内容を重視する。学力は、知的学力、技能的学力が中心になるが、態度的学力の形成にも関係している。教材は学習者の認知構造の変容をうながすように構成されているか否かが重視される。 状況論的アプローチは、学習を、何らかの社会・文化との関係でとらえ、共同体への実践的参加の過程での変容とする。そうした中では、知的学力や技能的学力が身につくにしても、態度的学力の関与が大きい。教材は、学習者をさまざまな共同体に参加させる中でどのように位置づけられるかが重視される（宮本　20-21）。
長谷川榮（2013）.「教材の構成」	教材選択の観点は、基本的には次の3点あげることができる。 (1) 目標論的観点 この教材ならば学習目標が達成できるのでははないか、または学習目標に接近できそうである、と想定される教材を求める

	ことである。 (2) 心理学的観点 子どもの興味や魅力を引き起こし、疑問問題を喚起させる教材を求めることである。 (3) 価値論的観点 学習内容として子どもにとって重要な意義があると認められる教材を求めることである。これは教材の専門的分析に関連する。 教材選択は、きわめて大事な作業である。その際、選択の根拠や理由を明確にもつことが教師に求められる（長谷川 b　29)。
新井郁男（2016）.「教材とは」	…「教材」は関係概念であることが分かるが、重要なのは、どのような関係であるかということである。様々な関係性を読み取ることができるであろうが、重要なポイントは、教育の目的・目標との関係、目的・目標を達成するための内容との関係、対象との関係、道義付けることにする。 「教育の目的・目標を達成するための内容を、教区の対象者に理解させるために制作・選択された図書その他の素材。広義には、教えるための道具ごしての教具を含む。」 教材を「文化財」と定義している事典・辞典も少なくない。広辞苑にれば、「文化財」は、「文化活動の客観的所産としての諸事象または所事物で文化価値を有するもの」と定義されている。教育活動も文化活動の一種であるから、作

	成・選択された教材を文化財とみなすことはできるであろうが、教材の多様性から考えて、これについてはいろいろ論議のあるところであるので、ここでは単に「素材」とした（新井　8-9）。
清水厚實（2016）.「教材には関する制度・作成・研究と教材の歴史」	…自然の事物、現象などをはじめ、人間生活の上で使われているものや見ることのできるすべてが教材となり得るわけで、その範囲は無限に近いといわれ、教材にしようとすれば、万物すべてが教材になるともいわれている。しかし、ここでは出版教材を中心に、その内容に触れることにする。 　現在、学校や家庭で使われている教材を大別すると下記の［修得教材］、［習熟教材］、［評価教材］の３つとなる。内容によっては、その２つあるいは３つの要素を兼ねたものもあるが、大きくはこのように分類し、それぞれの性格、機能などに触れることにする。 ［修得教材］　子どもたちが授業を通じて授業の目標、内容を修得していけるよう工夫された教材で、学習の最も初めの段階で基礎・基本を学習することのできるような構造と内容をもったものである。《準教科書、副読本、参考書、ワークブックなど》 ［習熟教材］　それぞれの教科の教育において求めている内容について理解し、習熟していけるように工夫された教材で、反復練習することによって知識や技術をスパイラルに深められ

	る構造と内容をもっている。《練習帳、学習帳、英語・国語単語帳、ドリルブック、スキルブックなど》 ［評価教材］　教科書の単元の終わった時点或いは中間などで、その単元での学習がどこまで到達したか、どこにつまずきがあったか、また、教師の指導の良さ、まずさなどがどこにあったかなどを発見し、次の指導に役立てることを目的とした教材。《テストブック、プリント、標準学力検査、知能検査、性格検査など》（清水厚實 24-26）。
新村出編（2018）.『広辞苑』	教授・学習の材料。学習の内容をいう場合と、それを伝える媒体を指す場合とがある。教材研究の教材は前者、教材作成は後者になる（新村 760）。
一般財団法人日本図書教材協会　授業と教材に関する調査研究委員会編（2019）.『授業と教材　教材の正しい理解と活用のために』	教材とは、一定の目的や目標を達成するために行われる教育において使われる素材のことです。目的・目標を達成するための内容は教育内容といわれますが、教材はその教育内容を児童・生徒に習得させるための素材です。つまり、授業を中心とした教育活動を展開するときに、その目的を達成するために提示・活用する素材ということになります（一般財団法人日本図書教材協会　10）。
小橋雅彦（2021）.『若い英語教師のための教材研究入門』	教材研究とは、教科書教材を含む「教材の吟味」と「教材に解釈」、その単元を学習することによって生徒に身につけさせる「言語能力」をゴールとした「目標設定」、そしてその目標を達

	成させるための「指導方法の検討」のことです（小橋　1）。

古賀恵子「学習意欲を喚起する教材」(1983) では学習意欲、動機付け、教材の関係について次のように述べている。

学習意欲、動機づけの問題は、教授過程においてのみならず、より本質的には、教材のレベルにおいても検討されなければならないであろう。どの教材を選択するかで、学習意欲を喚起するか否かが決定されるといっても過言ではないからである（古賀　58）。

教材は授業を支える一つであることは言うまでもないことだ。

授業は、教師と生徒とが共同して教材の学習（研究）にとりくむ活動である。授業を構成する基本的要素として、教師・生徒の活動のほかに必ずそこで教授-学習活動の対象となる教材がある。授業は、これら 3 者の相互関係のなかで成立する（柴田 a　1）。

教材は授業を展開する上で重要である。

羽鳥博愛『英語教育の心理学』(大修館書店、1994) では「Simplified text の効用」として次のように述べている。

英語の学習は「ならうよりなれろ」だとよくいわれる。ごくわずかの分量の英語をまるで数学の問題でもとくように分析的に理解しおぼえるよりは、多くの英語にふれて何となくわかってくるのがいいのだというのである。たしかにそうで、単語などもカードなどを作って苦心惨憺して頭につめ込むよりは、何回も文中で出会っているうちにひとりでにおぼえる方が自然であろう。そういう意味では英語の本は多

く読むほどいい。しかし、あまりむずかしい本では多くは読めないから simplified text が必要ということになっている。

英語教育の方でしばしば問題にされる thinking in English ということも、自分の力にぎりぎりのむずかしいものではふつうの日本人ではまずできない。たいていは日本語で考えてしまう。ところが自分の力よりもかなり下のやさしい英語だと日本語を媒介しないでも何とか英語のままでわかる。こういうことを考えると、新しい文型や未知の文法事項のふくまれていない英文でかつ大部分が既習の単語で書かれている英語を読むとき、はじめて thinking in English が作れるともいえる（羽鳥　295-296）。

海外の出版社ではこうしたものが数多く出版されているが、これを日本語の場合に当てはめて見れば何ら不思議なことではないだろう。古典として『竹取物語』は平易な日本語（現代文）となり、通称『かぐや姫』として絵本にもなり、紙芝居になるなどその典型であろう。

羽鳥は教材としての教科書の難点についても触れている。

筆者の考えでは、英語学習の興味を起こすには、（1）音声、（2）身近か、（3）わかる、（4）使える、という4つのことが条件であるが、身近かであることには、地理的な身近かなことと時間的に身近なであることの2つの面がある。時間的に身近かであるためには、教材がひんぱんに改訂出来る必要がある。ところが検定教科書は検定制度の関係で早くても3年に1度しか改訂できない。したがって、検定教科書だけを使てっていると本当に学習の時間にふさわしい話題をとりいれることはあまり期待できない（羽鳥　306）。

羽鳥は「（2）身近か」を地理的、時間的の2つの面があるとしているが、筆者はこれに精神的な側面を取り上げたい。具体的には、教材とし

て取り上げる文学、映画、マンガ、アニメなどの登場人物が中学生や高校生とほぼ同年代であり、そこでの会話は実生活にマッチしているだけでなく、精神的にも近いものになる。大人同士の会話でもよいのだが、中高生がよく話題とするものがそのまま英会話として登場すれば、興味の度合いが高くなる。

…自主教材には教師に与える心理的な影響もある。だれでも自分で作った教材の方が教えていては楽しいし、内容がよくわかっているから教えやすい。よく指導法についても、その人の得意な教え方で教えるのが、一番うまく教えられるということが言われているが、同じようなことが教材についても言える。自分の好みに合っている教材が一番よく教えられるのである（羽鳥　307）。

部活動をしてこなかった教員がこうした題材の英文を扱ったり、映画やマンガ／アニメをほとんど観ない教員がこの類の教材を作成すること自体困難になるだろう。筆者自身も「英語の教材研究事例～ポップカルチャーの活用：アニメ・マンガを中心に～」（日本英語文化学会第 129 回月例会、昭和女子大学研究館 6 S02、2014 年 12 月 13 日）を発表した際に、発表時の意見として「これはあなただからできるが、、、」との発言があったことを覚えている。教材には市販のもののようにどの教員でも活用できるものが用意されているが、自主教材はまさに作成教員の知見がそのまま反映されるため、他の教員がうまくそれを使いこなすことができるかどうかは定かではない。

深沢清治「文化的題材と学習者の興味関する一考察」（『中国地区英語教育学会研究紀要』第 10 号、中国地区英語教育学会、1980）によれば中学・高校生の興味について次のようにまとめている。

○学習者の興味が高い題材…食事、劇・映画、スポーツ、音楽、エピ

ソード、旅行、学校生活、趣味、日常生活、年中行事
○学習者の興味が低い題材…道徳、宗教、美術、電気、産業、地理、社会生活、職業生活、人種、ペット
そして、以上の調査結果をもとに、外国の人々の日常生活様式、ものの見方、考え方を表す題材に対して生徒の関心が高い傾向にあると考察している（深沢　14）。

上記の内容をみれば、この1980年代段階においても身近な内容・題材が興味を起こさせるものであることが分かる。以降取り上げる教材としての映画、マンガ・アニメにおいてもそのようにおいて「食事、スポーツ、音楽、エピソード、旅行、学校生活、趣味、日常生活、年中行事」が中心のものであれば、より興味関心が高くなるだろう。

3　英語教材とは

これまで教材研究を教科に関係なく見てきたが、英語教材と特定した場合にはどのようなことが考えられるだろうか。ここでは教科書以外の教材を「英語教材」「英語教材研究」として取り上げることにする。

教師養成研究会英語科教育部会（1956）.『英語科の教育』	教材は、利用的には、素材の実態調査、選択、編集の過程を経てでき上るべきものである。英語という教科の素材は実に厖大なものである。英米人が日常話している英語、英米人が現在書いている英語、英米人が過去において著した書物、英米という国、英米人という人間の過去、現在の活動、英米人が作り出した社会制度などは、ことごとく英語という教科の素材ではなる。しかし、これらの素材

	はあまりにも厖大である（教師養成　45）。 　市販の補助教材と使うことも考えらえるが、市販の補助教材では指導計画に合わない場合もある。そういう場合のために、教師は、教材として使えそうな資料を絶えずたくわえておくようにすると便利である。英語科としても、資料となるような図書、定期刊行物、パンフレット、辞書、年鑑、地図帳などを備えて、補助教材（のみならず、教材研究用参考資料）の供給源を豊富にしておかなくてはなるまい。 　学習指導上、教科書、補助教材と同様、あるいはそれ以上に重要な教材は、教師自身の（1）英語（2）英語という言語についての知識、（3）英米文学についての知識、（4）英米および英米人についての知識などである（教師養成　48）。
大沢茂・安藤昭一・黒田健二郎・成田義光（1978）.『現代英語科教育法』	英語科では教科書だけが教材ではなく、教科書の他にも教材がたくさんある。教室で使用される録音テープの英語，テレビの英語、picture cards, flash cards の英語もみな教材である。(大沢他　5)
太田朗・伊藤健三・伊藤元雄・下村勇三郎・渡辺益好（1980）.『新しい英語学習指導―中学校から高校	Oral approach は、既に述べたように、言語の重要な基本材料はすべて対立する特徴を持っているという構造主義言語学の主張に基づいている。したがって、学習指導を効果的にするためには、教材の中にこの対立が組織的に組み入れられ、単音、音調、強勢、語形、

へ』	語順などの対立的特徴を識別し、発表できるように練習しなければならない（太田他41）。
清水貞助（1980）.『英語科教育法』	言語のあらゆる重要な事項は対立的な特徴を持っており、言語における意味の差異は、これらの対立的特徴によって示されている。したがって教材は、音韻・語形・語順等の対立的特徴が明らかで、しかも英語の構造が「連続する対立する小さな段階」をなし、各 段階の相違が小さく、学習上の抵抗ができるだけ小さくなるように選択・配列されていることが理想である。すなわち、「連続する 対立の小さな段階」は教材の選択・配列に関する最も重要な原則である（清水貞助　117）。
垣田直巳（1981）.『英語科重要用語300の基礎知識』	教材（teaching materials）とは、ある特定の指導事項を学習させるための材料である。ここの授業で扱う教材というように比較的短いものを指すこともあれば、LL教材というように特定の言語コースの教材の全体を指すこともある。 　授業を構成するものとして昔から学習者、教材、教師の３つの柱としてあげられている。教材はその意味から言って授業を成り立たせる重要な要素である（垣田　129）。
松畑熙一（1985）.「学習者中心の英語教育」	…「英語学習の原理」の項でも述べたように、教材配列が既知から未知へ、易から難へとスモール・ステップでなされる時、学習は容易になる。しかし、その前に、教材に何を

	盛り込むべきか、という教材内容の選定（selection）の問題がある。英語に関するすべての事項について学習することは、特に外国語の場合には時間的制約が大きく、不可能なので、何らかの基準に基づいて、英語全体の母集団（population）の中から（sampling）をして選出することになる。このように、教材編成上、何を選び、どのように並べるかという選定（selection）と配列（gradation）の問題が中心となる。その選定と配列をどのように行なうかを考える時、教材編成の基本原理が明確に示されねばならない（松畑　65-66）。
小川芳男他編（1982）.『英語教授法辞典　新版』	一般には、児童・生徒が学習によって、一定の教育の目標を達成するために選ばれた文化素材と定義できる。1 つの箱を示し、This box is made of wood. と言った場合、箱そのものについては教育的な追求すなわち学習がなされていず、be made of の使い方とか、wood の意味が教授される。したがって教材は箱ではなく be made of や wood である。英語学習指導においては、英語そのものが教 材であるとすべきである。(小川　651)
米山朝二（1989）.『英語教育―実践から理論へ―』	英語の授業で主役を演じるメディアは、現在でも教科書です。しかし，教科書のみを用いることはまれであり、それに付随した様々な教材，教具が同時に用いられるのが普通です。対象の学習者、教室環境等によって、使われ

	る教材，教具は多種多様ですが、その多くは教科書と同等の役割を果たすようになっています。したがって、それらの内容，使用方法について、教科書の内容の準備 と同等の注意を払うことが必要です。次のような教材、教具のすべてあるいはその一部がセットになって準備され、供給されます(米山　248-249)。
田中正道（1990）.「英語教材編成原理」	英語教材の良し悪しは英語教育の結果と直接影響が及ぶ。英語教材は、それゆえ、英語教育の営み全体の中で最も重要な要素のひとつといっても過言ではない。 ところで、英語教材は無目的、無計画に作成されるものではない。英語を教えたり学んだりするということは、どういうことなのかということを考えながら教材作りはなされる。別の言い方をすれば、英語教授・学習観が教材作りの背後には必ずある（田中　38)。
西村嘉太郎(1994).「言語活動のための教材」	言語活動のための教材（教科書を利用して）教科書の普通の Lesson は、authentic な listening 教材ではないが、教育的に見ればリスニングも他のスキルと平行して伸ばすことが実際的であるし、指導要領のいう言語活動のすべてをカバーする教材ともなり得る。(西村　79)
小寺茂明（1996）.『英語教科書と文教材研究』	教材には、その目的やレベルなどによって、いろいろなものが考えられる。したがって、「教材研究」という言葉はかなり範囲の広いものと言えるが、ここでは「教科書」を中

	心とした研究で、日常の授業準備としての意味のある研究を考えたい。また、それは同時に英語教師の指導に役立つ、「やや高度な教材研究」であることを目指すものでもありたい。(小寺　15)
次重寛禧（2002）.『英語授業の創造』	言うまでもなく、教材研究は、単に明日教えるべき教科書教材の下調べ、たとえば、不確かな語の発音を確認したらい、語句や文の意味とか語法や表現などについて一通り理解しておくことにとどまるものではない。勿論、教師は、扱うべき教材についてよく調べ、一般的な理解に達しておくことは必須であるが、この段階の教材は、厳密に言えば、まだ一つの素材であるにすぎない。教師は、素材の一般的な理解・解釈の上に立って、その素材を教室で教材としてどのように生かすべきかについて、検討し研究しなければならない。これが教材研究である。これを行うためには、いろいろな素材の中から、授業の目標や生徒の能力などに照らして教材内容を取捨選択し、それが教材として生徒の中にいきるためには、どのようにしてそれを生徒に投げかければよいかという教授方法のあり方を考える必要がある。つまり、教材研究には、教授目標や生徒の能力などを考慮に入れて、教材として何をとりたてるべきかの視点から教授方法の検討を行う面とがある。しかも、この両面は、相互に綿密はかかわりを持っているの

	である（次重　10）。 　上述の英語教室としての教材研究を行うためには、 　① 素材としての英語の言語的および文化的側面からの研究 　② 教科書について（日本のものだけでなく、可能な限り外国のものについても）の調査・研究 　③ 先達や同僚が示してくれた教材試案や教材要綱、教材に関する実践報告などについての研究 　④ 言語学的・心理学的条件、文化的・教育学的条件などを考慮を入れた教材に関する理論的研究 などの諸研究を、平素からできるだけ手がけておくことが望まれる。この基礎の上に、われわれの求めるよりよき教材とは何なのかを考えることになる。 　英語教育における教授内容の研究は、英語教育の目的に関する研究と切り離して考えることはできない。その目的によって、教授内容も変ってくるからである。何のために英語教育はなされるのかが問われなければならない。そして、その目的のもとにおける教授内容のあり方が追求されるべきである。従来、この面の研究が十分でなかったとは言えまいか。われわれは、今、英語教育は果たして他のものでは置きかえることのできない独自の

	教育的役割を持っているのか、それはいったい人間形成に貢献することができるのか、もし貢献できるとすればどのような面においてであるのか、その面からみた教授内容はどうなのか、など根本的な問題を思考する段階に来ており、その視点からの教材研究が期待されるのである。 一方、授業担当者としての教材研究では、まず、生徒の実態をよく把握し、それに即した研究を進めていくことが何よりも大切である。調査しておきたい項目として、 ① これまで英語についてどのようなことをどの程度まで学習しているか ② 英語学習に対してどの程度の興味を持ち、動機づけがなされているか（学習へのレディネス） ③ 知能や性格はどうか ④ どんな才能があり何に興味を持っているか ⑤ 他教科での成績はどうか、他教科ではどんなことを学習しているのか ⑥ 家庭での学習環境および学習状況はどうか などを挙げることができる（次重　11-12）。
高梨庸雄「教材開発」（2007）	Cunningsworth(1995)によると、教材の役割には下記のようなものがある。 ① プレゼンテーション用資料（話し言葉・書き言葉）

	② 学習者の練習及びインタラクション用資料 ③ 文法、語彙、発音などの学習者用参考資料 ④ シュミレーション及び授業内活動の資料 ⑤ シラバス（指導妄評及び指導項目一覧表） ⑥ 経験の浅い教員補助資料 これに Dudley-Evans and St.John(1998)の考えを追加すれば次のようになる。 ⑦ ESP (English for Spesific Purposes)用言語資料 ⑧ 学習援助用資料 ⑨ 刺激及び動機付け用資料 このリストを見るだけでも、教材イコール教科書という考えが、いかに視野の狭いものであるかがわかる。授業のいろいろな段階や局面に様々な教材の使い道がある。「“自分で教材を作る”ことなど自分にはとても無理」と思っている教師もいるかもしれないが、今では参考資料がたくさん出版されているし、インターネットの英語教育関係も資料の宝庫である。しかし、それらの資料の中には「自然な（authentic)」ものであるか、「生徒のレベルに合った適切なものであるか（graded)」という問題がある（高梨　196-197)。
伊藤嘉一（2008).	(1)英学時代の教材

「外国語教育の本質と教材」	外国の進んだ文化の摂取が目的なので、外国の書物(原書)がそのまま教材として使われた。「パーレイの万国史」や「クワッケンボスの合衆国史」などである。アメリカの国語教科書である「ロングマン」、「スウィントン」、「ユニオン」、「ニューナショナル」などのリーダー(読本)は復刻され、盛んに使われた。「独案内」や「独学び」のような虎巻も巷に出回り、学習の手助けとなった。これらには日本語の逐語訳と訳す順番がふられたものもあった。 英米で出版された辞書や英文法書、綴字書なども利用された。外国の書物を読むことが目標だったので、発音は重視されなかった。学習指導要領の前身である「教授要目」の学習指導の指標となった。 (2)文学・語学時代の教材 文学教材を読めるようになることが究極の目標だったので、教材にも物語や簡略化された文学作品が多数盛り込まれた。戦前はパーマー (H.E.Palmer) のオーラル・メソッドが、戦後はフリーズ (C.C.Fries) のオーラル・アプローチが教材に大きな影響力を与えた。 発音記号が開発され、教科書にも導入されるようになった。発音は戦前はイギリス式が、戦後はアメリカ式が使用されるようになった。教科書の登場人物や話題も、戦前はイギリス、戦後はアメリカが中心となった。

	戦後を象徴するのは視聴覚教材の普及である。ラジオやレコード、映画などである。やがてテープレコーダーが出現し、構造言語学や行動主義心理学の理論と結びついてLL(Language Laboratory)が普及し、LL教材が花形となった。 (3)コミュニケーション時代の教材 日本の経済力の高まりと国際化の進展により、海外に行く日本人や日本に来る外国人の数が多くなり、対人コミュニケーションの機会が増えた。 外国語教育の目的がコミュニケーションに置かれ、指導の重点が文字言語（読むこと・書くこと）から音声言語(聞くこと・話すこと)に移った。 学習指導要領に「言語活動」という用語が登場し、それはさらに発展し、「具体的な言語の使用場面を設定して、聞き手や話し手となってコミュニケーション活動を行うこと」などが明示された。 やがて外国人教師―AET(Assistant English Teacher) や ALT(Assistant Language Teacher)も学校に配置されるようになり、外国人と直接コミュニケーションできるようになった。ビデオ教材やCD教材、さらにはCD-ROM教材まで出現し、教材のメディアが多彩となった（伊藤 320-321)。 これからの外国語教材

	世界のグローバル化、日本のますますの国際化を見据えて、外国語教材においても以下のような改革が必要である。 (1)夢のある楽しい教材をつくる 教材は児童・生徒にとっては心の糧であり、教科書で習ったことは一生忘れないほど大きな影響力をもつ。したがってそれは学習を動機付け、興味や好奇心をかき立て、学習を促進するものでなければならない。世界や外国人、未知の世界への夢を育むものでなければならない。 (2)英語の極端な正確さにこだわらない 世界の人々が英語を使うようになり英語が多様化し、英語の正確さの基準があいまいになってきている。将来は「国際的に通じるか、通じないか」が正確さの基準になるであろう。文法的、音声学的正確さに過度にこだわるのは現実的ではあい。テストや評価にもそのような配慮が必要である。 (3)小・中・高の外国語カリキュラムと教材を一貫させる 中学校と高校のカリキュラムは一貫しているので、小学校と中学校の外国語カリキュラムを一貫させる。そのためには小学校の英語を教科とすることがどうしても必要である。 (4)学校や学年レベルの到達目標を明確にする 小・中・高の到達目標のレベルを明確にし

	ないと実効性が高まらない。例えば、小学校では「外国人と最小限の音声コミュニケーションができる」、中学校は「日常の基礎的なコミュニケーションが4技能においてできる」、高校では「将来の進路に応じた基礎的なコミュニケーションができる」などという具体的目標である。高校の卒業の時点でのコミュニケーション英語の完成を目指す必要があろう。このためには小学校での英語の早期導入が必要である。 (5)四技能の重要性の変化 戦前戦後長い間日本ではリーディングがもっとも重要な技能と考えられてきた。平成5年筆者は音声言語：文字言語の重要性の比率を60:40（%）とし、ヒアリング（H）：スピーキング（S）:リーディング（R）：ライティング（W）= 35:25:30:10（%）と考えた。教材も各技能均一の学習配分ではなく、ウエイトをかけて作成すべき時代になっている。 (6)共生の観点から外国語教育を考える 21世紀に入り、世界の急激なグローバル化が進んでいる。一国の問題が一国にとどまらず、世界が一体化して協調し合わなければ共存できない時代になっている。このような時代にあっては「共生のための外国語」がもっとも必要である。「グローバル言語としての英語」と「近隣言語」の重要性が高まっている。

	近隣言語は中国語、韓国語、ロシア語などである。高校では英語は少なくとももう一か国語を学習する必要であろう。さもないと高卒で終わる人は、英語以外の外国語へのなじみがなく、「外国語＝英語」の意識をもってしまうであろう。 (7)第二次基礎言語としての英語 英語はすべての外国人と話す標準言語として、そして仕事や生活の言語として今後ますます重要性を帯びて来る。日本人によって日本語を第一次基礎言語とすれば、英語はそれに次ぐ基礎的な言語、すなわち「第二次基礎言語」となるであろう。この位置づけが重要である (8)メディアの特性を生かした多様な教材が必要である 外国語を教科書だけで教えるのは過去の時代である。現在はネィテヴスピーカーの音声を録音した CD は常識的な備品となっている。しかし CD は場面を提示することはできない。 コミュニケーションを提示するにはどしてもビデオなどの映像が必要である。授業の最初にコミュニケーションを見せると言語の使い方が具体的となり、学習がしやすくなる。音声を消して画面を見ながらスキットさせると応用・実践活動になる。これまでは同じ内容をいろいろのメディアに置き換えただけの

	教材が多かったが、これからは各メディアの特性を生かした多様な教材が求められる。将来的には自己学習できる CD-ROM 教材やインターネットを活用して海外の人と直接コミュニケーションできる教材なども望まれる（伊藤　323-325）。
蒔田守（2011）.「教材研究と授業の準備」	教科書はたてまえは主教材ということになっているが、英語科の 場合には常に主教材であるとは限らない。リーディングを目的とする授業の場合には、教科書のレッスンがそのままリーディングの教材になり得る。しかし教科書はしょせん印刷物にすぎないから、リスニングやスピーキングや口頭練習を主とする授業においては、それは決して主教材とはなり得ない。教師の話す英語や CD・テープの音声が主教材である（蒔田　128）
相澤一美（2012）.「英語科教育における「教材」の概念に関する文献的研究」	英語科の「教材」を比較するうえでの観点として、以下の５つが挙げられる。 (a) 特定の授業法で英語を教えるために綿密に設計された学習材料。特に Oral Approach 用の学習材のこと。 (b) 英語の素材の中から学習目的を実現するために選択し、段階づけし、体系化した学習のための材料を教材とする立場。教科書、市販教材、教師自主教材などがある。 (c) 英語の素材（文字化・録音された資料）を広く教材とする立場。新聞、雑誌、放送英語など多様な教材がある。

	(d) 学習者が学習の目的で接する文字化された英文や音声化された英語そのものを広く教材と考える立場。教科書は、テキスト本文を読む場合に教材と解釈される。教師の発話もリスニングの教材に含まれる。 (e) 英語の学習に含まれる言語材料、文化、国際理解などのすべての内容を網羅したものを教材とする立場。教科書で提示される内容は、教材の一つの例にしかすぎない。 以上の分類では、(a)が「教材」の最も狭義の定義であり、(b)から(e)に続くに従って、教材の概念がより広くなる。 結論として、教材を「英語の素材の中から学習目的を実現するために選択し、段階づけし、体系化した学習のための材料」と定義するのが妥当と思われる（相澤 a　53-54）。
相澤一美（2013）.「言語観と教授法、教材開発と活用」	英語科の「教材」を比較するうえでの観点として、以下の５つが挙げられる。 (c) 特定の授業法で英語を教えるために綿密に設計された学習材料。特に Oral Approach 用の学習材のこと。 (d) 英語の素材の中から学習目的を実現するために選択し、段階づけし、体系化した学習のための材料を教材とする立場。教科書、市販教材、教師自主教材などがある。 (c) 英語の素材（文字化・録音された資料）を

	広く教材とする立場。新聞、雑誌、放送英語など多様な教材がある。 (d) 学習者が学習の目的で接する文字化された英文や音声化された英語そのものを広く教材と考える立場。教科書は、テキスト本文を読む場合に教材と解釈される。教師の発話もリスニングの教材に含まれる。 (e) 英語の学習に含まれる言語材料、文化、国際理解などのすべての内容を網羅したものを教材とする立場。教科書で提示される内容は、教材の一つの例にしかすぎない。 以上の分類では、(a)が「教材」の最も狭義の定義であり、(b)から(e)に続くに従って、教材の概念がより広くなる。 結論として、教材を「英語の素材の中から学習目的を実現するために選択し、段階づけし、体系化した学習のための材料」と定義するのが妥当と思われる（相澤 b　399)。
千葉元信（2013).「英語教育教材論」	中学校や高等学校における正規の授業では検定教科書を使い、また課外授業などの場合は補助教材を使うのがふつうのであるが、いずれにしても、教材は教師と生徒をつなぐものであり、教師が生徒に望ましい英語力を身につけっせようとするときの主要手段となる。教材は、教材の奥にある、より大きな英語世界への入り口にもなっている。

	一方で生徒の外側から教材を見れば、生徒は教材に出てくる英語を覚え使用することをめざす。この努力の過程で生徒は英語力をつける。さらに教材の背景となる文化的環境、言語的事項などを自ら調べたり、教師から解説を受けたりして、学習を深化させる。教育において教材の果たす役割は大きく、教師は教材の選定に常に厳しい目を持っていなければならない、ということになる（千葉　40）。
嶋田和成（2019）.「英語科の教材」	教材論の体系化はまだまだこれからであるが、主なテーマは、どのような教材が学習者の言語習得に寄与できるのか、そしてそのような教材はどのようにデザインすればよいのか、とういことであろう。英語科の授業では、教科書の他の様々な教材が使用されるが、教師は常に生徒の言語取得を念頭に日頃の教材研究を行い、教材の選択、改作、自主教材の作成などに取り組んでいくことが重要である（嶋田　98）。

上記の表では言語活動ごとの細かな教材については取り上げなかったが、音声に関する教材については佐野正之「言語活動のための教材論」(1994)では“authentic material”として次のように述べている。

教師と英語で対話したりAETの話を聞くことは、interactionalなリスニングだから、ある意味では最もauthenticではあるが、言語レベルは生徒の実態に合わせるといった配慮が行われるのが普通なので、ここでは、テレビや衛星放送などで接するnativeを対象にした英語を

教材とする場合を扱うことにする。

こうした教材の長所は、音声面でも内容面でも本物で、理解できた時の生徒の成就感が大きいことである。反面、生徒の言語能力に合った教材を探すことは困難である。そこで、こうした教材は、授業の一部として位置づけ、ゴールにチャレンジさせる意味で与えるのがよい。それでも、次のような配慮が不可欠である。

1）task は平易なものから段階的に指示し、成功感を与える。

2）生徒の興味のある、また、予備知識のあるトピックを選らぶ。

3）ビデオなどの視覚的な援助を与え、集中点は前もって指定する。

4）理解に必要な予備知識は、前もって与える（佐野　81）。

最近は音声だけの教材以上に、映像を伴う教材の活用が増えている。映像を伴う教材を音声だけで利用する場合がある。映像、具体的には映画やアニメを活用した教材について別の機会にまとめて取り上げたい。

さて、上記の表では取り上げなかったが、紹介しておきたい資料がさらに４つある。時系列で以下紹介する。

第１に米山朝二・佐野正之『新しい英語科教育法—問題解決と活動中心のアプローチ』(1985) では「やる気」と絡めながら指導方法を以下の５つの箇条書きで紹介している

アレン（E.Allen, 1978）は学習者に「やる気」を持たせるには、まず今の生徒（“Now” Student）の特徴をとらえることが大切だとしています。それによれば今の生徒は、すぐに満足 (immediate satisfaction) を欲しがり、練習して修得するよりも、直ちにコミュニケーションをしたがるから、こうした欲求を充足させるカリキュラムや指導方法を持たねばならないとしています。箇条書きすれば、

① 学習者のニーズや興味を中心に教材を選定し、楽しい授業を心がけねばならない。

② 本来の言語使用の場面（外人の訪問客とか海外旅行とか、さもなければ劇の公演のような活動）を保証しなければならない。

③ 単純な内容でも学習したことは、すぐに教室内でコミュニケーションに利用し、本物の情報の授業が生ずるようすべきである。

④ 単に言語技術の伸びを目的にするだけでなく、情緒的にもアピールし、満足を与えるものでなければならない。換言すれば文化的な興味をそそり、外国の同年輩の人達の生活や考え方を知らせるなど、同一化が生じやすい教材や活動を与えるべきである。

⑤ 教師自らが意欲的で、人間的接触を大切にし、短期的ゴールの設定も必要である。

こうした指摘は、ガードナー等がかかげながら、議論の途中で見落とされてしまった点に気づかせてくれます（米山・佐野　126-127）。

アレン（E. Allen, 1978）とは E.D.Allen "Motivation in the Class" (F.M.Grittner, editor. *Student Motivation and the Foreign Language Teacher*. National Textbook Company, 1978. pp.1-10)のことである。

第２に英語の教材をまとめて扱ったものとして長谷川潔・森住衛編『英語教育教材事典　楽しく学ぶ英語の教材』(『英語教育』別冊・2　第 36 巻第 12 号）（1987）がある。その目次は以下の通りである。

1	文字のいろいろ	2	句読法
3	発音のルール	4	絵で見る単語
5	読みもの	6	詩―鑑賞と創作
7	生徒がつくるスピーチ	8	暗唱のためのパッセージ
9	自由英作文	10	日記・手紙
11	生活基本語と基礎英語会話		
12	教室で使う英語	13	ドラマ
14	英語の歌	15	ゲーム

16　ことば遊び　　17　ユーモア・ジョーク・とんち話
18　ことわざ・名言　　19　街でみかける英語
20　マンガ　　21　時事英語

「20　マンガ」に注目すると、そこに取り上げられているものは中学用として庄司陽子『生徒諸君！』の英語版 *SEITO SHOKUN!*、ガーフィルド（Jim Davis.　*The Second Garfield Treasury*）、エイミィ（Amy）を取り上げている。『生徒諸君！』はマンガとしては 1977 年～1985 年にかけて連載され、TV ドラマ『生徒諸君！』は 1980 年～1981 年、その後小泉今日子主演で実写映画『生徒諸君！』（1984）、その後アニメ化もされている。主人公・北城尚子、愛称「ナッキー」が転校生として聖美第四中学校 2 年 A 組にやってきたことから始まっており、その後の成長を考えると、中学・高校生にまさに身近な教材ということになろう。高校用として Snoopy, Charlie Brown、植田まさしのマンガ、フジ三太郎のマンガが紹介されている。キャラクターとしてはスヌーピーなどは良く知られているところであるが、1970 年～1980 年代はともかく、果たしてはマンガとして、あるいはアニメとして現在の中高生はどのくらい見ているかは疑問である。マンガであれば何でもよいというわけではない。出来るだけ身近なものを教材として考えるのであれば、日本のマンガの英語版のほうがはるかに身近であろう。以前の教科書では、日本の昔話が英語で書かれたものが掲載されたこともあった。しかし、中高生に英語版の『桃太郎』や『浦島太郎』などがどの程度興味を弾くのかは疑問も残る。もちろん、これを題材にした英語劇などの場合には小学生ぐらいであればある程度の効果が期待できるかもしれない。

長谷川潔・森住衛編『英語教育教材事典　楽しく学ぶ英語の教材』が 1987 年に出版されているが、1987 年段階ではインターネット以前であること、さらに映画のスクリーンプレイの日英語対訳等が本格的に発行されるようになったのは 1988 年からであることを考えると、インター

ネット関係や映画が英語教材として取り上げられていないのも頷けるところだ。

第3にJACET教育問題研究会編『英語科教育の基礎と実践[改訂版]—新しい時代の教員をめざして』(2001) では教材研究の2つの面が指摘されている。

> 教材研究をすることによって、教材の中で取り上げられている内容に関する知識を深める。英語の教員であるからといって、英語という「ことば」だけに関係があるわけではない。英語の語法面の知識だけあれば、いいわけではない。英語の語法面のみならず、他の分類の知識も要求される。現在の教科書に盛り込まれている題材は、文学的読み物から環境問題、情報化社会、宇宙の話など、広範囲の題材にわたっている。英語の教員なのに、化学の専門の先生が話すような内容を、授業で扱わなければならないのかなどと弱音をはいているわけにはいかない。日本国内だけでなく、外国の人々の生活・文化・風習のことも取り上げられている内容、教えようとする事柄についての知識を持たなければならない。教材の内容・語法の理解を深めるとともに、教材よく読んで自分のものにする。具体的には、教科書の本分をなめらかに言えるようになるとよい。これは、自身の研修としても、授業を進行させる上でも役に立つ。
>
> 次に、自分が広く深く研究した内容を、どのように生徒に伝えるかの方法を考慮しなければならない。自分が吸収した知識のうち、どの部分が学習内容として生徒に必要であるのか、それを精選する必要がある。研究した内容を全部あれもこれも授業中に説明したら、時間が不足するであろうし、教材で扱うべきポイントも見失われてしまう (JACET　153)。

題材にはそれぞれ内容があるため、その内容に関する教員の見識も問わ

れることになる。英語はあくまでも表現している言語にすぎず、言語で表現されている内容が問題である。教材研究として考えるべきものである。

第４に日本教材学会編『教材事典　教材研究の理論と実践』(2013)の教材活用を見ておきたい。

外国語活動
ナーサリー・ライム、ゲーム、外来語、劇活動、世界の料理、動物の名前、遠足で見たものや様子、ハロウィン

外国語（英語）
文法教材、単語集の活用、音読、内容理解、すべての語句の聞き取り、概要の聞き取り、日記・手紙を書く、自分について書く、話すことの基本練習、ディスカッション、ディベート

外国語活動に比べて、外国語(英語)での具体的な教材は取り上げられていない。

学習指導要領が改訂され、扱う言語領域が４領域から５領域となった。

今回の改訂では，小学校中学年に新たに外国語活動を導入し，三つの資質・能力の下で，英語の目標を「聞くこと」，「話すこと［やり取り］」，「話すこと［発表］」の領域において設定し，音声面を中心とした外国語を用いたコミュニケーションを図る素地を育成した上で，高学年において「読むこと」，「書くこと」を加えた教科として外国語を導入し，五つの領域の言語活動を通してコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することとしている。中学校及び高等学校では，こうした小学校での学びを踏まえ，五つの領域の言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力を育成することとしている

（文部科学省 d　7-8）。

中には4領域・2分野と表現する研究者もいるが、「話すこと［やり取り］」と「話すこと［発表］」は別の能力である。そのことは母語であっても同様である。「話すこと［発表］」の必要性が高まり、いわゆるプレンテーション能力が求められているのは英語に限ったことではない。高等学校の教育課程に情報科が設置され、情報リテラシーのひとつとして情報機器を利用してのプレゼンテーションが謳われている。

ア　情報の表現 ここでは，情報の表現における多様な技術や技法などの基礎的な知識を取り上げ，メディアの特性や情報デザインと関連させながら扱う。また，情報に関するコンテン ツなどを効果的に活用した情報発信やプレゼンテーションの実例を取り上げ，対象や 目的に応じて表現することの重要性などについて扱う。その際，将来を見据えた新た な情報の表現方法や視点についても積極的に扱うことが重要である（文部科学省 a　92）。

情報リテラシーに英語力を加えた発表も当たり前の時代を迎えている。『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説　外国語編　英語編』（2018）の「教材についての配慮事項」で次のように示している。

3　教材については，次の事項に留意するものとする。

(1) 教材は，五つの領域別の言語活動及び複数の領域を結び付けた統合的な言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力を総合的に育成するため，各科目の五つの領域別の目標と2に示す内容との関係について，単元など内容や時間のまとまりごとに各教材の中で明確に示すとともに，実際の言語の使用場面や言語の働きに十分に配慮した題材を取り上げること。その際，各科目の内容の（1）に示す文法

事項などを中心とした構成とならないよう十分に留意し，コミュニケーションを行う目的や場面，状況などを設定した上で，言語活動を通して育成すべき資質・能力を明確に示すこと（文部科学省 d　137)。

当然のことながら、１つの教材で「五つの領域」を同時、あるいは段階を追って活用できるものが望ましいのは当然のことだ。

エピローグ

教材研究はいわゆる「教授法」の中で取り扱われる程度であった。それには教科書中心という考え方、あるいは教科書を教えるという時代の影響があったことは言うまでもないことだ。しかし、教科書で教える時代となり、さらに検定教科書が頻繁に内容を変えることができないという大きな足枷がある。そのため身近な話題の時間的な問題を解消することは難しい側面がある。これらを補うのが自主製作による教材の最も大きな利点である。

岡秀夫編『グローバル時代の英語教育―新しい英語科教育法―』(2011) では英語帝国主義などを取り上げている一方、飯野厚「第８章　教材・教具」では教材について教科書選択基準や副教材の作り方などを取り上げているが、教材作成については「とりわけ自主的に作成する副教材は生徒の実情にあわせるために重要である (飯野　101)。」としているものの、ほとんど取り上げていない。ここで注目しておきたいこととして教具として「視覚メディア」としては以下を取り上げている。

（1）　黒板
（2）　プリント
（3）　フラッシュ・カード
（4）　ピクチャー・カード
（5）　OHC

黒板も現在では電子黒板なども登場しているため、より IoT が進んでいる。プリントも学生にタブレット端末が配布されていれば、その使用方法も大きく変わる。電子黒板との連動など、wi-fi 環境が整備されていれば、その使い方は拡大される。どう活用するのか、どのような活用方法があるのかもまた、教員の能力次第ということになる。また、筆者自身はフラッシュ・カードやピクチャー・カードの代わりにパワーポイントをスクリーンに投影している。また、OHC (Over Head Camera)はよく書画カメラとも言われるが、以前なら OHP (Overhead projector)であったものが電子黒板と同様に IoT 化され、教員にもこうした教育機器の操作が求められる時代となっている。

インターネット上の動画も活用されることを主眼にして公開されているものもあれば、全体というよりは部分的に教材として使用できる動画などもアップされている。教材として使用できるかどうかはこれを視聴した教材作成者の視点によることになる。

教材作成には教具との関わりも大きな要因となるが、これは時代が進むにつれて利便性が高まり、様々な可能性が広がっている一方、教科に関わらず、情報機器操作や IoT に対応できる教員の力量も求められる時代となったことは無視できないところだ。

注

(1) 佐々木隆「アニメを利用した英語教材研究」(『武蔵野英語教育研究』第 2 号、武蔵野英語教育研究会、2005 年 1 月)、 pp.1-20。

(2) 佐々木隆「教員免許状更新講習と英語教材研究」(『武蔵野教育研究』第 3 巻第 2 号、武蔵野教育研究会、2016 年 2 月)、pp. 1 -18。

(3) 日本教材学会「設立趣意書」
http://www.kyozaigakkai.jp/%e8%a8%ad%e7%ab%8b%e8%b6%a3

%e6%84%8f%e6%9b%b8.html, 2023 年 6 月 18 日アクセス。

引証資料

相澤一美 a（2012）.「英語科教育における「教材」の概念に関する文献的研究」、『教材学研究』、第 23 巻、日本教材学会。

相澤一美 b（2013）.「言語観と教授法、教材開発と活用」、日本教材学会編、『教材事典　教材研究の理論と実践』、東京堂出版。

新井郁夫（2016）.「教材とは」、日本教材学会編、『教材学概論』、図書文化社。

飯野厚（2011）.「教材・教具」、岡秀夫編、グローバル時代の英語教育―新しい英語科教育法―』、成美堂。

石子順（1978）.『新マンガ学』、毎日新聞社。

磯田一雄（1990）.「教材」、横須賀薫編、『授業研究用語辞典』、教育出版。

一般財団法人日本図書教材協会　授業と教材に関する調査研究委員会編（2019）.『授業と教材　教材の正しい理解と活用のために』、一般財団法人日本図書教材協会　授業と教材に関する調査研究委員会。

伊藤嘉一（2008）.「外国語教育の本質と教材」、澤崎眞彦他、『「教材学」現状と展望』、上巻、日本教材学会。

奥住忠久（1993）.「教材研究」、牧昌見編、『新学校用語辞典』、ぎょうせい。

卯城祐司（2001）.「学習者」、望月昭彦編.『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』、大修館書店。

梅根悟（1953）.「教授法」、青木誠四郎他編、『教育科学辞典　普及版』、朝倉書店。

大沢茂・安藤昭一・黒田健二郎・成田義光（1978）.『現代英語科教育法』、南雲堂。

太田朗・伊藤健三・伊藤元雄・下村勇三郎・渡辺益好（1980）.『新しい英語学習指導』、リーベル出版。

小川芳男編（1982）.『英語教授法辞典』、新版、三省堂。
小田幸信（1991）.「教材と教科書」、安藤昭一編、『英語教育　現代キーワード事典』、増進堂。
小野慶太郎（1982）.『人間形成における教材選択の視点』、東洋館出版。
角山照彦（2008）.『映画を教材とした英語教育に関する研究』、ふくろう出版。
垣田直巳編（1981）.『英語科重要用語 300 の基礎知識』、明治図書。
桂直美（2013）.「教科書」、日本教材学会編、『教材事典　教材研究の理論と実践』、東京堂出版。
教師養成研究会英語科教育部会（1956）.『英語科の教育』、学芸図書。
神戸大学教育学部教育学研究室編（1960）.『教育用語辞典』、三一書房。
古賀恵子（1983）.「学習意欲を喚起する教材」、垣田直巳監修／三浦省五編、『英語の学習意欲』、大修館書店。
小寺茂明（1996）.『英語教科書と文教材研究』、大修館書店。
小橋雅彦（2021）.『若い英語教師のための教材研究入門』、大学教育出版。
三枝孝弘（1973）.「教材・教具」、『現代教育用語辞典』、第一法規出版。
佐藤正夫（1966）.「教材研究」、相賀徹夫編、『教育事典』、小学館。
佐野正之（1994）.「言語活動のための教材論」、片山嘉雄他編、『新・英語科教育の研究　改訂版』、大修館書店。
篠原助市（1935）.『教育辞典』、宝文館。
清水厚實（2016）.「教材に関する制度・作成・研究と教材の歴史」、日本教材学会編、『教材学概論』、図書文化社。
清水貞助（1980）.『英語科教育法』、開拓社。
次重寛禧（2002）.『英語授業の創造』、鷹書房弓プレス。
柴田義松 a（1980）.「教材研究の課題」、吉田昇・長尾十三二・柴田義松編、『授業と教材研究』、有斐閣。
柴田義松 b（2001）.「教材研究」、日本カリキュラム学会、『現代カリキ

ュラム事典』、ぎょうせい。
新村出編（2018）.『広辞苑』、岩波書店。
嶋田和成（2019）.「英語科の教材」、久保田章・林伸昭編、『授業力アップのための英語教育学の基礎知識』、開拓社。
主原正夫（1978）.「教材」、細谷俊夫他編、『教育学大事典』、第一法規出版。
周郷博（1959）.『新現代教育用語辞典』、大日本出版。
末岡敏明（2008）.「中学校英語教科書の質的分析―作る立場・使う立場から見た現状と問題点―」、澤崎眞彦他『「教材学」現状と展望』、下巻、日本教材学会。
高梨庸雄「教材開発」（2007）. 高梨庸雄・高橋正夫編、『新・英語教育学概論』、金星堂。
高橋金三郎（1978）.「教材研究」、細谷俊夫他編、『教育学大事典』、第一法規出版。
竹中輝夫（1969）.『教材研究の基礎』、明治図書。
田中正道（1990）.「英語教材編成原理」、松村幹男編、『英語教育学』、福村出版。
千葉元信（2013）.「英語教育教材論」、村野井仁・千葉元信・畑中孝實、『実践的英語科教育法　総合的コミュニケーション能力を育てる指導』、成美堂。
富田竹三郎（1961）.「教材」、梅根悟・海後宗臣監修、『現代教育事典』、明治図書。
冨田福代（2003）.「教材研究」、中谷彪・浪本勝年、『現代教育用語辞典』、北樹出版。
中内敏夫（1978）.『教材と教具の理論』、有斐閣。
納谷友一（1952）.『英語の新教育用語辞典』、健文社。
西村嘉太郎（1994）.「言語活動のための教材」、片山嘉雄・遠藤栄一・佐々木昭・松村幹雄編、『新・英語科教育の研究』、改訂版、大修館書

店。
萩原弘子（1992）.「英語の授業における視聴覚教育の役割」、東眞須美編、『英語科教育法ハンドブック』、大修館書店。
長谷川榮 a（2006）.「教材学とは」、澤崎眞彦他、『「教材学」現状と展望』、上巻、日本教材学会。
長谷川榮 b（2013）.「教材の構成」、日本教材学会編、『教材事典　教材研究の理論と実践』、東京堂出版。
羽鳥博愛（1994）.『英語教育の心理学』、大修館書店。
深沢清治（1980）.「文化的題材と学習者の興味関する一考察」、『中国地区英語教育学会研究紀要』、第 10 号、中国地区英語教育学会。
福沢周亮（2008）.「教材と心理」、澤崎眞彦他、『「教材学」現状と展望』、上巻、日本教材学会。
藤川大祐（2010）.「教材・教具」、岩内亮一他編、『教育学用語辞典』、第 4 版改訂版、学文社。
藤岡信勝（1988）.「教材づくりとは何か」、青木一他編、『現代教育学事典』、労働旬報社。
本多公栄（1988）.「教材研究」、青木一他編、『現代教育学事典』、労働旬報社。
蒔田守（2011）.「教材研究と授業の準備」、土屋澄男編、『新編英語科教育法入門』、研究社。
松畑熙一（1985）.「学習者中心の英語教育」. 羽鳥博愛・松畑熙一『学習者中心の英語教育』、大修館書店。
三村和則（2003）.「教材づくり」、山﨑英則・片上宗二編、『教育用語辞典』、ミネルヴァ書房。
宮坂義彦（2003）.「教材」、山﨑英則・片上宗二編、『教育用語辞典』、ミネルヴァ書房。
宮本友弘（2013）.「教材研究」、日本教材学会編、『教材事典　教材研究の理論と実践』、東京堂出版。

文部科学省 a(2000).『高等学校学習指導要領解説　情報編』、開隆堂。
文部科学省 b(2018).『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説　外国語編　英語編』。
https://www.mext.go.jp/content/1407073_09_1_2.pdf、2023 年 7 月 26 日アクセス。
山口満（2008).「教材とは」、澤崎眞彦他、『「教材学」現状と展望』、上巻、日本教材学会。
米山朝二・佐野正之（1985).『新しい英語科教育法―問題解決と活動中心のアプローチ』、大修館書店。
米山朝二（1989).『英語教育―実践から理論―』、松柏社。
JACET 教育問題研究会編（2001).『英語科教育の基礎と実践［改訂版］―新しい時代の教員をめざして』、三修社。

【キーワード】英語、教材、教材研究、教材学

『新教育課程研究』における掲載

「特別活動と総合的な学習の時間における人間形成の教育的意義」(『新教育課程研究』第1号、武蔵野教育研究会、平成30年1月)、1-15頁

「集団活動の意義—校外を意識して」(『武蔵野教育研究』第3巻第16号、武蔵野教育研究会、平成30年2月)、1-14頁

「人間関係の構築の必要性について」(『新教育課程研究』第2号、武蔵野教育研究会、平成30年2月)、1-17頁

「イギリス文化の源流・ケルト文化の取り扱いについて—高等学校から大学へ—」(『新教育課程研究』第3号、武蔵野教育研究会、平成30年5月)、1-45頁

「アメリカ文化の根底:『人種のるつぼ』から『サラダボウル論』—中学校・高等学校から大学へ」(『新教育課程研究』第4号、武蔵野教育研究会、平成30年6月)、1-38頁

「アメリカの源流:American Indianはどう扱われて来たか—中学校・高等学校から大学へ」(『新教育課程研究』第5号、武蔵野教育研究会、平成30年7月)、1-26頁

「特別活動　部活動の取り扱いに関する動向を巡って」(『新教育課程研究』第6号、武蔵野教育研究会、平成30年8月)、1-31頁

「超少子高齢社会における日本の教育改革—総合的な学習の時間の果たす役割—」(『高齢社会と地域』第1号、高齢社会研究会、平成30年8月)、1-23頁

「主体的・対話的で深い学びとは—総合的な探究の時間の教材の考察:超少子高齢社会を背景にして」(『高齢社会と地域』第2号、高齢社会研究会、平成31年2月)、1-17頁

「教職課程(再課程認定)における英語学の位置付け」(『新教育課程研究』第7号、武蔵教育研究会、平成31年3月)、1-27頁

「教育現場における外部人材の活用について」(『新教育課程研究』第8

号、武蔵野教育研究会、令和元年5月)、1-19頁
「『英語文学』の授業展開一考察—『ロミオとジュリエット』を事例として—」(『新教育課程研究』第9号、武蔵野教育研究会、令和元年7月)、1－20頁
「『英語文学』の授業展開一考察—『リア王』を事例として—」(『新教育課程研究』第10号、武蔵野教育研究会、令和元年8月)、1-12頁
「学習指導要領にみる総合的な学習の時間・総合的な探究の時間における評価の問題」(『新教育課程研究』第11号、武蔵野教育研究会、令和元年10月)、1-16頁
「英語辞書に関する学生の意識について」(『新教育課程研究』第12号、武蔵野教育研究会、令和2年1月)、1-16頁
「英語教育に見る道徳的観点」(『新教育課程研究』第13号、武蔵野教育研究会、令和2年2月)、1-27頁
「『英語文学』の授業展開に関する一考察—『ハムレット』を事例として—」(『新教育課程研究』第14号、武蔵野教育研究会、令和2年3月)、1-10頁
「『英語文学』の授業展開に関する一考察—『マクベス』を事例として—」(『新教育課程研究』第15号、武蔵野教育研究会、令和2年4月)、1-10頁
「『英語文学』の授業展開に関する一考察—シェイクスピアの取り扱いについて—」(『新教育課程研究』第16号、武蔵野教育研究会、令和2年5月)、1-28頁
「『総合的な学習の時間』に関する学生の意識」(『新教育課程研究』第17号、武蔵野教育研究会、令和2年6月)、1-24頁
「『特別活動』に関する学生の意識」(『新教育課程研究』第18号、武蔵野教育研究会、令和2年7月)、1-20頁
「障害者スポーツの表現を巡って—adapted sportsとは何か」(『新教育課程研究』第19号、武蔵野教育研究会、令和2年8月)、1-52頁

「英訳マンガから見る英語表現の一考察—『のだめカンタービレ』と『鬼滅の刃』を事例として—」(『新教育課程教育研究』第 20 号、武蔵野教育研究会、令和 2 年 11 月)、13-27 頁

「英訳マンガから見る英語表現の一考察—『美少女戦士セーラームーン』と『名探偵コナン』を事例として—」(『新教育課程研究』第 21 号、武蔵野教育研究会、令和 2 年 12 月)、1-24 頁

「COVID-19 下における特別活動」(『新教育課程研究』第 22 号、武蔵野教育研究会、令和 3 年 4 月)、16-27 頁

「英語辞書に関する学生の意識とデジタル化—COVID-19 を超えて」(『新教育課程研究』第 23 号、武蔵野教育研究会、令和 3 年 5 月)、1-24 頁

「教育方法としての遠隔授業」(『新教育課程研究』第 24 号、武蔵野教育研究会、令和 3 年 6 月)、1-31 頁

「道徳教育実践報告：中学校の道徳教育」(『新教育課程研究』第 25 号、武蔵野教育研究会、令和 3 年 11 月)、1-27 頁

「『総合的な学習の時間の指導法』の実践報告」(『新教育課程研究』第 26 号、武蔵野教育研究会、令和 3 年 12 月)、1-16 頁

「遠隔授業の実践報告－English Reading & Writing の授業の場合」(『新教育課程研究』第 27 号、武蔵野教育研究会、令和 4 年 2 月)、1-13 頁

「『鬼滅の刃』を利用した教材研究：『鬼滅の刃 無限列車編』を中心に」(『新教育課程研究』第 28 号、武蔵野教育研究会、令和 4 年 4 月)、1-48 頁

「教育課程と学習指導要領：教職課程で取り扱うべき内容」(『新教育課程研究』第 29 号、武蔵野教育研究会、令和 4 年 9 月)、1-28 頁

「道徳教育実践報告：中学校の道徳教育—多様性と情報モラル」(『新教育課程研究』第 30 号、武蔵野教育研究会、令和 4 年 10 月)、1 -23 頁

「教育行政の一考察—教員免許状更新制度—」(『新教育課程研究』第 31 号、武蔵野教育研究会、令和 4 年 12 月)、1 -36 頁

「部活動の行方—指導なのか、働き方改革なのか—」(『新教育課程研究』第 32 号、武蔵野教育研究会、令和 5 年 2 月)、1-20 頁

「英訳マンガから見る英語表現の一考察—『SPY×FAMILY』を事例として」(『新教育課程研究』第 33 号、武蔵野教育研究会、令和 5 年 4 月)、1-48 頁

「英訳マンガから見る英語表現の一考察—『呪術廻戦』を事例として」(『新教育課程研究』第 34 号、武蔵野教育研究会、令和 5 年 5 月)、1-43 頁

「英訳マンガから見る英語表現の一考察—『転生したらスライムになった件』を事例として」(『新教育課程研究』第 35 号、武蔵野教育研究会、令和 5 年 6 月)、1-24 頁

「英訳マンガから見る英語表現の一考察—『ドラゴンクエスト　ダイの大冒険』を事例として」(『新教育課程研究』第 36 号、武蔵野教育研究会、令和 5 年 7 月)、1-47 頁

「英訳マンガから見る英語表現の一考察—『進撃の巨人』を事例として」(『新教育課程研究』第 37 号、武蔵野教育研究会、令和 5 年 8 月)、1-48 頁

「英訳マンガから見る英語表現の一考察—『進撃の巨人』を事例として」(『新教育課程研究』第 37 号、武蔵野教育研究会、令和 5 年 8 月)、1-48 頁

「英訳マンガから見る英語表現の一考察—『ドラゴンボール』を事例として」(『新教育課程研究』第 38 号、武蔵野教育研究会、令和 5 年 9 月)、1-49 頁

「英訳マンガから見る英語表現の一考察—『四月は君の嘘』を事例として」(『新教育課程研究』第 39 号、武蔵野教育研究会、令和 5 年 10 月)、1-36 頁

「英訳マンガから見る英語表現の一考察—『君に届け』を事例として」(『新教育課程研究』第 40 号、武蔵野教育研究会、令和 5 年 11 月)、

20-48 頁

「英訳マンガから見る英語表現の一考察―『銀魂』を事例として」(『新教育課程研究』第 41 号、武蔵野教育研究会、令和 5 年 12 月)、1-35 頁

「英訳マンガから見る英語表現の一考察―『僕のヒーローアカデミア』を事例として」(『新教育課程研究』第 42 号、武蔵野教育研究会、令和 6 年 1 月)、1-57 頁

「英訳マンガから見る英語表現の一考察―『鋼の錬金術師』を事例として」(『新教育課程研究』第 43 号、武蔵野教育研究会、令和 6 年 2 月)、1-48 頁

「英語教材研究の一考察：学習意欲、動機付け」(『新教育課程研究』第 44 号、武蔵野教育研究会、令和 6 年 3 月)、1-79 頁

『武蔵野英語教育研究』及び『武蔵野教育研究』における掲載

「大学の教職課程と教員養成における英語教育」(『武蔵野英語教育研究』第 1 号、武蔵野英語教育研究会、平成 16 年 7 月)、1-15 頁

「アニメを利用した英語教材研究」(『武蔵野英語教育研究』第 2 号、武蔵野英語教育研究会、平成 17 年 1 月)、1-20 頁

「学習指導要領と英語教員養成」(『武蔵野英語教育研究』第 3 号、武蔵野英語教育研究会、平成 17 年 7 月)、1-13 頁

「『教科に関する科目』と英語教員養成」(『武蔵野英語教育研究』第 4 号、武蔵野英語教育研究会、平成 17 年 10 月)、1－12 頁

「『教科に関する科目』の一考察――『異文化理解』をめぐって――」(『武蔵野英語教育研究』第 5 号、武蔵野英語教育研究会、平成 18 年 1 月)、1-14 頁

「改正教育基本法に関する一考察」(『武蔵野英語教育研究』第2巻第1号、武蔵野英語教育研究会、平成20年10月)、1-23頁
「新しい学習指導要領と小学校英語について」(『武蔵野英語教育研究』第2巻第2号、武蔵野英語教育研究会、平成20年11月)、1-27頁
「教員免許更新制度について」(『武蔵野教育研究』第2巻第3号、武蔵野教育研究会、平成20年12月)、1−24頁
「小学校英語と児童英検について」(『武蔵野教育研究』第2巻第4号、武蔵野教育研究会、平成21年1月)、1-13頁
「教養教育に関する一考察　事例　武蔵野学院大学の場合」(『武蔵野教育研究』第2巻第5号、武蔵野教育研究会、平成21年2月)、1-14頁
「コース制度に関する一考察　事例　武蔵野学院大学の場合」(『武蔵野教育研究』　第2巻第6号、武蔵野教育研究会、平成21年6月)、1-23頁
「武蔵野学院大学の教育課程と人材認証制度」(『武蔵野教育研究』第3巻第1号、武蔵野教育研究会、平成26年2月)、1-17頁
「教員免許状更新講習と英語教材研究」(『武蔵野教育研究』第3巻第2号、武蔵野教育研究会、平成28年2月)、1 -18頁
「幼児教育学科の英語教育」(『武蔵野教育研究』第3巻第3号、武蔵野教育研究会、平成29年1月)、1-23頁
「英語教育の現状報告—授業の実践例から—」(『武蔵野教育研究』第 3巻第4号、武蔵野教育研究会、平成29年2月)、1-26頁
「教職課程の英語学に関する一考察」(『武蔵野教育研究』第3巻第5号、武蔵野教育研究会、平成29年3月)、1-20頁
「英語科教育法に関する一考察—実践例と今後の展開—」(『武蔵野教育研究』第3巻第6号、武蔵野教育研究会、平成29年4月)、1-27頁
「教育実践例　教材に関する学生の反応と指導—Advanced English Reading—」(『武蔵野教育研究会』第3巻第7号、武蔵野教育研究会、平成29年5月)、1-12頁

「教育実践例　教材に関する学生の反応と指導―英書講読―」（『武蔵野教育研究』第 3 巻第 8 号、武蔵野教育研究会、平成 29 年 6 月）、1-10 頁

「教育実践例　教材に関する学生の反応と指導―国際文化交流―」（『武蔵野教育研究』第 3 巻第 9 号、武蔵野教育研究会、平成 29 年 7 月）、1 -23 頁

「教育実践例　教材に関する学生の反応と指導―英米文学史―」（『武蔵野教育研究』第 3 巻第 10 号、武蔵野教育研究会、平成 29 年 8 月）、1 -11 頁

「謎だらけの葛飾北斎の『キューピッド』」（『武蔵野教育研究』第 3 巻第 11 号、武蔵野教育研究会、平成 29 年 9 月）、1-33 頁

「教育実践例　英語の語彙に関する学生の意識―英語学の視点から―」（『武蔵野教育研究』第 3 巻第 12 号、武蔵野教育研究会、平成 29 年 10 月）、1-19 頁

「『総合的な学習の時間』に関する一考察―横断的・総合的・探求的な学習に向けて―」（『武蔵野教育研究』第 3 巻第 13 号、武蔵野教育研究会、平成 29 年 11 月）、1-13 頁

「『英語文学』に関する一考察―実践例と今後の展開―」（『武蔵野教育研究』第 3 巻第 14 号、武蔵野教育研究会、平成 29 年 12 月）、1-20 頁

「評価に関する一考察―総合的な学習の時間と特別活動について」（『武蔵野教育研究』第 3 巻第 15 号、武蔵野教育研究会、平成 30 年 1 月）、1-17 頁

執筆者一覧

佐々木　　隆　　武蔵野学院大学教授

新教育課程研究　第45号
2024年4月30日　発行
武蔵野教育研究会　編集・発行

〒350-1328
埼玉県狭山市広瀬台３丁目２６番１号
武蔵野教育研究会事務局
武蔵野学院大学　佐々木隆研究室

Studies on New Curriculum

Number 45

30 April, 2024

The Society of Musashino Education Studies